

高齢者施設における認知症高齢者の生活環境について —PEAPに基づく環境支援の取り組み—

岡田 邦子

Kuniko Okada

はじめに

介護老人福祉施設は生活の場であり、介護職員や看護職員などが協力して、入居者のその人らしい生活の実現を目指して支援している。特に、認知症高齢者の多い施設では、その症状に合わせた環境支援が重要とされる。「認知症高齢者への環境支援のための指針（PEAP）」を参考に、当施設で生活環境支援に取り組んだ例を報告する。

施設の特徴

平成18年3月に、入居定員80名、ショートステイ10名の全室個室のユニット型特別養護老人ホーム（以下特養とする）として開設された。入居者の平均年齢は87.3歳、平均介護度3.9で、認知症高齢者の日常生活自立度Ⅲ a～Mの者が81.8%である（平成24年度）。

取り組み例

取り組み1：居室の環境改善

82歳女性 要介護4 全盲、難聴、軽度認知機能障害（MCI）

施設に入居するまでは自宅内の日常生活動作は自立していた。しかし、入居後はベッド上で過ごすことが多く、日常生活全てに介助が必要な状態であった。PEAP「生活の継続性への支援」を考慮して、自宅から家具や小物などを持ってきてもらい、自宅の部屋のように配置した。その結果、居室内で衣類の選択やお茶を飲むなどできる

ようになった。

取り組み2：食事場面の雰囲気づくり

入居者が食事をするユニット内の共有スペースは無機質で冷たい印象があり、高齢者は誰とも話さずに黙々と食べていた。PEAP「環境における刺激と質の調整への支援」を考慮して、高齢者が楽しみながら食事ができるように家庭的な雰囲気づくりを行った。その結果、高齢者が食事時間に会話するようになり、食べ残しも減少した。

取り組み3：談話スペースの設置

ユニット内に居室以外で高齢者がくつろげる空間がなく、また高齢者が交流する場所もない。PEAP「自己選択への支援」「ふれあいの促進」を考慮して、高齢者が居室以外でくつろぐ空間、高齢者や職員と交流できる場所を設けた。家庭のリビングを参考に、家具やテレビを置いた。その結果、高齢者が一人でくつろいでいたり、仲の良い入居者同士で過ごす姿がみられ、職員と談笑する場面も見られるようになった。

まとめ

今回の取り組みを通して、集団生活の場でも高齢者一人一人の入居前の生活状況を知り、それに近づける環境支援が重要であることを再確認した。入居前の生活を知るためには家族や在宅サービス従事者の情報が必要である。高齢者の身体機能の維持や認知症の重症化予防など健康管理を担う看護職員として、今後も環境支援に取り組みたい。

高齢者施設における 認知症高齢者の生活環境

～PEAPに基づく環境支援の取り組み～

社会福祉法人 美郷会
特別養護老人ホーム 美来

施設長
岡田 邦子

1



2

特別養護老人ホーム美来 平成18年3月開設



ユニット型(定員80名 他にショートステイ定員10名)
平均87.3歳 平均介護度3.9
Ⅲa～Mの認知症高齢者 81.8% (平成24年度)

3

職員による施設環境の検討

職員からの意見

- 高齢者の食事場面无機質で食べにくそう、落ち着かない
- 高齢者が落ち着いて過ごす場所がない、見守りがしにくい
- 食堂では施設からの提供する物だけになっている
- 高齢者の入所前と環境変化が大きく、慣れるまで不安そう



住環境の見直しが必要！
PEAPを手掛かりに検討

4

PEAP(ピープ)とは？

Professional Environmental Assessment Protocol
(専門的環境支援指針)

「高齢者への環境支援への指針」

□8つの目標

- 1.見当識への支援
- 2.機能的な能力への支援
- 3.環境における刺激の質と調整
- 4.安全と安心への支援
- 5.生活の継続性への支援
- 6.自己選択への支援
- 7.プライバシーの確保
- 8.ふれあいの促進

認知症高齢者への環境支援のための指針
PEAP日本版3より引用

5

<取り組み 1>

居室の環境改善

対象者:T氏 82歳 女性 要介護4

ADL :全盲、難聴

MCI(軽度認知機能障害)

歩行可能だが、声掛け誘導が必要

性格 :きちんと片付けるなど神経質

自分の意見をはっきりと伝える

6

生活の継続性への支援 (PEAP 5)

入居時の居室の状況



入居後の高齢者の状況

- ・ほぼベッド上での生活
- ・移動は職員の誘導が必要で一人では行動できない



歩行可能、片付けなど
きちんとした性格ときいて
いたのに・・・このままでは
心身機能の低下の恐れ

7

入居前の状況を情報収集・アセスメント
(家族・介護支援専門員)



家具の配置、薬の置き場所、衣類などを収納
する引き出しなど、長年にわたり同じ位置



目標

高齢者がこれまで実施してきた生活行動を継
続して行うことができる。
(そのために、居室を入居前の生活環境に近
づけるよう工夫する。)

8

取り組み内容



- ① 自宅の家具を持ち込む
- ② 入居前の自宅と同様の配置とする

結果



笑顔などがみられ表情が明るく豊
かになった。
居室では自由に行動できるようにな
った
(衣類の選択、洗濯物の整理、お
茶を飲むなど)

9

<取り組み 2> 食事場面の雰囲気作り

PEAP 3 環境における刺激の質と調整

ユニットの食堂

- ・無機質な冷たい印象
- ・高齢者が黙々と食べている



目標

高齢者が食事を楽しみなが
ら食べる。
(そのために、食事場面を家
庭的な雰囲気に近づける。)

10

取り組み内容



- ① テーブルに花を飾る
- ② ユニットでの炊飯
- ③ ランチョンマットや箸置き



結果

食べ残しが減少し、摂取量が増えることがあった
花を飾ることで会話が生まれ
楽しく食事をする姿がみられた

写真使用については了承を得ています

11

談話スペースの設置

PEAP 6 「自己選択への支援」「ふれあいの促進」

改善前の談話スペース ① ユニット内にくつろげる空間がない



② ユニット内で高齢者同士で交流する場所がない

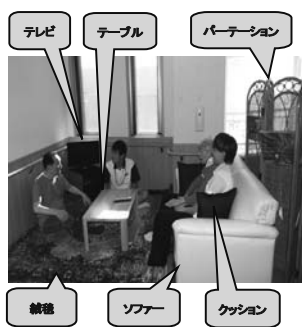


目標

高齢者が居室以外でくつろいだり、高齢者同士や高齢者と職員とで交流できる場所

12

取り組み内容



- ① パーテーションで空間を分けた。
- ② 家庭のリビングを考慮して、絨毯やソファ、テーブル・TVを設置



結果

工夫した空間で高齢者が一人
でいたり、仲の良い高齢者同
士が過ごす姿が見られた。
高齢者と職員が談笑する場面
も見られた。

13

高齢者施設で環境支援

- 高齢者の入居前までの生活を継続できるよう工夫したことで、自立した生活を実現できた。
- 家庭的、落ち着ける環境になるよう配慮したことで、高齢者間の交流などが見られるようになった。
- 環境支援には過去の生活を知ることが重要であり、施設内にとどまらない連携が必要と考える。
- 高齢者の身体機能の維持や認知症の重症化予防など健康管理を担う看護職員として、今後も環境支援に取り組みたい

14